

【現代語訳】

皆さまと同様、生業は様々ですが、新春はおめでたいラブレターを書くものですよ。私は「恋のお手伝い」を売り歩いています。恋文の数々は、口説き上手なら、惚れ上手というものですよ。相思相愛でも片思いでも、縁の種を撒くために、枝に結び文をして届けるのです。これも恋人を得る、世渡りの習いですからね。
(文売りの女)

「さあさあ、これは恋を商うラブレター屋でございます。」

私が商う手紙の数々は、夜の口説きやピロー・トークで、

拙いものではありませんが、まあ、聞いて下さいいな。」

廓の毎日は忙しく、辛い勤めです。毎晩、寝る男は替るけど、

その中でも惚れた男も出来るのですが、

「オット、よしてくれよ、その手口で恋の深みにまた俺を引っ掛けようとしてるんだな」と、男から意地悪を言われたりします。

「さあ、帰ろかな」と席を立つのを引き止めて、

今日は、とりわけ色々と言いたいことや、聞いておきたいことが沢山あるって、その約束だったのに今朝になって、じゃあねってなんなのよ。あの頃は、初めてエッチした翌朝に、家の出口まであなたを見送る嬉しさがあったわ。

あれだけ心に思う、愛の言葉を言い交わしたのに、何なのよ。

そんな痴話喧嘩の最中に、突然、脇から一人の文売り女が現れ、

(文売りの女)

この同じ廓で「小田巻」という太夫が、毎晩送るラブレターの数々。もう、三万三千三百三十三通もの、禿に指図して届けた手紙です。それに返事が無いのに腹を立てて、紅葉の打ち掛けを勝美太夫の顔に目掛けて脱ぎ捨てたのが、私の傍に落ちました。

(小田巻)

「これ、勝美さん、

私はね、嫌なお方に惚れたりほしくないものよ。

だから、今までお前が大事にしていた『あの人』を、

今日から私に下さいいな。」

と、客を貰いに来たズカツと言うものだから、こっちの勝美

太夫の方も、日頃の鬱憤が溜まっていて、

(勝美)

「これ、小田巻とか、くだ巻きとか言っているけど、

折角の、お前のお申し入れだけれど、もう百年も経った後に

熨斗を添えて、私の主さんをお前にあげようかねえ。」

一同が、ああ馬鹿らしいと言いつつ、つい手が出て、突き退けた弾

みに、ばたばたと、縁側から下に落っこちた人がいて、顎を打って、痛い、痛いと言き出す始末。

騒ぎの声を聞きつけて、小田巻担当の、遣り手、引き舟、仲居、飯炊き、出入りしている座頭の按摩師、更に外からも巫女、山伏、古い屋さんまで、片足は雪駄、片足は下駄とか藁草履をつっかけて駆けつけて来るものまで有りましたよ。

台所から座敷まで、互いに相手の太夫さんに「仕返しだー」とか言っつて、ここでは殴り合い、つねり合い、あちらでは銚子や爛鍋を踏みつけてひっくり返し、それこそ津波が打ち寄せてかき混ぜる感じで、隠居が子を産んだなどと、ありもしないことをわめき、ソレ鯉節だ、挿り鉢だと、物を取り上げて、がらがらピシヤリともの凄いい音に、「怖いよ、怖いよ」と、観音経を唱える者までいました。太夫達が可愛がっている子猫が、馬ほどに大きい鼠をくわえて駆け出すやら、屋根裏ではイタチが踊り狂うやら、大騒ぎなのです。

まるで神武天皇のご即位以来の出来事となった、愠氣の諍いとして世の中に知れ渡りました。

月影が映っても水は澱まないけれど、暫しの間留められる逢坂の関所で披露された物語として残されていて、誠に勇ましい内容であったのです。

令和五年九月十一日

大中正比呂 拙訳

